

ジャガイモと映画 (12)

<粉ふき (3)>

Web ジャガイモ博物館館長

あさ ま かず お
浅間 和夫

45 『マンホール (Man-hole)』

2001年、邦画。監督：鈴木貴之。

映画にジャガイモが出てくるものを探すのは意外と難しい。北海道ではジャガイモを『いも』と呼ぶ。かつて『いも侍』のタイトルに魅かれて、映画を観たことがあったが、サツマイモのことを指しており、期待が外れたことがある。そんな話を、あるワインを楽しむ集いのおりに映画業界に詳しい札幌の横田昌樹さんに話したところ、即座にこの『マンホール』を知らせてくれた。以後このような人には会えず、自力で300あまり探すことになった。その中で最もジャガイモが顔を出す回数が多く、4回を数えた映画がやはりそれであった。

札幌の女子高生の鈴木希（のぞみ、三輪明日美）がひたたくりにあう。交番勤務の勤勉な警察官小林正義（安田顕）が助けるが、希は何故か黙って立ち去る。家庭不和の希は“進学アカデミー”というデートクラブに所属し、佐藤という男とお話とカラオケの相手をしたりしていた。そこには雇われマスター寒河江純（大泉洋）がおり、気楽に女達の使い走りもやっており、まずC社のチップス『堅あげポテト』も買ってくるシーンを見せる【1回目】。

その実直な警察官小林が住む警察寮へ帯

広にいる母親からダンボール入りの『十勝男爵』という新ジャガが送られてくる【2回目】。小林は高校生の不思議な行動、援助交際の一端を戒めるようなことをホームページに書いている。そして大量の粉ふきを作り食べているシーンもある【3回目、写真1】。



写真1 ひとり身には大量の「男爵薯」の粉ふき

またホームページを見た女学生が警察官に逆切れしてパソコンストーカーとなり、警察本部へ嫌がらせをし始めたため、小林は署長命令で自宅謹慎となる。そのため寮でジャガイモに八つ当たりしてひと箱を畳にばら播いてしまう【4回目】。小林が鈴木家を訪ねるが教師のメンツを重んじる父は避ける。希は家出し、マスターのほうも佐藤夫人が店に乱入の後、辞めてしまう。

河川敷で希と小林が出会うことがあり、

小林が悪かった、と言う。それなら紙に願いを書いて流せば幸せになるという噂のマンホール探しに協力してくれと言われ、タクシーで郊外に出かける。運転手もその噂を知っていて、「人生夢を持たなきゃ」と言う。ついにマンホールを発見し、二人で穴に降りていく。そこは、オーロラの出る地底湖のようなところであり、願いを書いた紙の小舟を流すことが叶う。

46 『男はつらいよ 寅次郎忘れな草』

1973年、邦画。監督：山田洋次。

ひとりの俳優が演じた最も長い映画シリーズとしてギネス世界記録に認定されたシリーズの第11作。マドンナ役浅丘ルリ子 が初めて登場した映画であり、以後通算計4回も出演している。

久しぶりに葛飾柴又に帰ってきた寅次郎（渥美清）は、さくら（倍賞千恵子）と博（前田吟）が満男にピアノ買うかどうかで揉めているのを知り、皆の喜ぶ顔が見たくて買ってくる。しかしこれが玩具のピアノ。変な雰囲気気がついた寅次郎は、皆に悪態をついて、北海道へと向かう。

夜行列車の中で涙を流していたドサ廻りの歌姫リリー（浅丘ルリ子）と網走で再会し、寅次郎の“ホ”の字に火がつく。

寅次郎は網走市郊外の酪農家で頑張るものの、日射病になり、心配して飛んできたさくらと柴又に帰ってくる。その数日後、リリーが尋ねて来る。その時歓迎の熱い心を表徴する粉ふきジャガが山と出てくる（写真2）。家庭の味に触れ、胸が熱くなったリリーは庭の鉢植えの紫の花を見つけてその名を聞く。それがタイトルの忘れな草であった。

後日、リリーが寿司屋の板前と結婚して、小さな店を出すことになる。その頃寅次郎は、再び北海道の酪農家に戻り、晴れ渡った青空下で汗をかいているのだった。



写真2 とらやのリリーさん歓迎の粉ふき

47 『ヘイフラワーとキルトシュー』

（英題：Hayflower and Quiltshoe）

2002年、フィンランド映画。監督：カイサ・ラスティモ。

父親（アンティ・ヴィルマヴィルタ）はジャガイモの研究に没頭し、母親（ミンナ・スローネン）は家事がとても苦手であり、毎日食卓にジャガイモ料理が並ぶ一風変わった家族である（写真3）。このため、幼い子供達はときどきスパゲッテー料理を欲しがっている。

姉ヘイフラワー（カトリーナ・タヴィ）は甘えてばかりの妹キルトシュー（ティルダ・キ アンレト）の面倒をよくみてやり、母を助けて家事までこなす、しっかり者。しかし家族で開催した運動会のあることが契機で、我慢の尾が切れ、無口に変身、素晴らしい役柄を降りることになる。二人の幼い姉妹を中心に、この変わった家族のことや隣人達とのふれ合いを描いた心温まるストーリーが展開していく。



写真3 ジャガイモはいつも食卓にある

48 『サルサ！（原題：Salsa!）』

1999年、フランス・スペイン映画。監督：ジョイス・シャルマン・ブニュエル。

ここで『サルサ』とは、70年代前後、ニューヨークに住むプエトリコ人や亡命してきたキューバ人達が、自分たちの故郷の音楽にソウル、ロックなどを融合させて生み出した情熱的ラテン音楽のことである。

主人公である若き天才クラシックピアニスト、レミ（ヴァンサン・ルクール）はクラシック・ピアニストとしての未来を捨て、キューバ音楽をやりたくて、肌をチョコレート色に焼き、ショパンを捨てて情熱の音楽サルサを選んでいった。ところが、パリのラテンバンドが望んでいるのは本物のキューバ人であった。

レミはキューバ人を装ってモンゴと名乗り、キューバ・バーでサルサのダンス教師をするが、彼の教室へ通う良家のパリジェンヌでシャイなナタリー（クリスティ・ア

ンヌ・グウ）が現れて恋に落ちてしまう。

レミはナタリー家のディナーに招かれ、祖母などの暖かな眼差しはあるものの、貧しいキューバ人への同情も注がれており、ナタリーが失礼さに腹を立てる。

その直前のシーンでナタリーが「さあ、ジャガイモ食べて」と画面右隣の婚約者たる彼に次々と取ってくれる（写真4）。



写真4 ナタリーからのジャガイモサービス

自分を偽ってまで、やりたいことに立ち向かう主人公が、「中身」の大切さに気づくというテーマ。ナタリーとのロマンス、さらにはナタリーの祖母の初恋の相手がレミを可愛がってくれていた人とわかったり、ナタリーの既婚約者から横やりがあったり、レミの身元を告白しようとしても、ナタリーの情熱でひと時を失ったり・・・。

最後はナタリーがコンテストで決勝のダンスを棒に振って、やはりレミへと走り、彼がラテン音楽演奏中の広場に駆け付け、ラブ・ストーリーのエンディングとなる。